

用意して作業場に行き、休息時間に歩哨や監督に聞いて発音を片仮名で記した。作業から帰って、就寝後、ランプの光で復習し、翌日、実際に話したりして習熟したので、何とか日常会話には不自由しくなくなり、自分の意思を伝えることができ、作業現場でも役に立った。三か月間、事務所勤務を命ぜられ、ロシア人と寝食をともにし、心の底から信じ合い語り合うことができた。

次に食生活であるが、先にも述べたとおり、物資の輸送が麻痺したとき、みそをお湯に溶かしただけの汁を飯ごうの中ぶた一杯で終わったり、ジャガイモ三個だったこともあった。夕食後や休みの日には、それぞれの国情自慢の料理に花が咲き、白い米の飯に塩をつけた握りが食べたい、果てはせんざいとするこの違いに論議が及ぶ等何を描いても食い気の毎日であった。

このような状態の中、入ソ一年目は、栄養失調やビタミン不足に悩まされたのである。毎月の身体検査で極度の疲労者（Cクラス）は療養施設に送られたが、私も二回送られた経験がある。

急性肺炎にかかり抵抗力がなく、だれも知らぬ間にひ

とり息を引きとった者もいた。生きて故国の土を踏めずに異国の地でこの世を去った彼らの魂は今どこにいるのか……。戦争の犠牲になって捕虜のまま死んでいくのはさぞかし残念であったらうと思う。

幾度も移動するたびに「ダモイ東京」を聞かされ、だまされ続けたこと、歩哨に銃で小突かれたこと等々、走馬灯のごとく思い出され、私たちの脳裏からいつまでも消え去ることはない。

シベリア抑留の体験

新潟県 阿波根 朝 宏

シベリア抑留体験は、今までに多くの抑留者らが、それぞれの立場や、環境での体験談が発表されている。それには、抑留の苦難、過酷な労働、ノルマによる食事のことなどさまざまである。

シベリア抑留は、その体験者が語っているように、全く複雑多岐であり、その焦点の把握が難しい。私も自分

のシベリア抑留体験を取り上げようとすると、どこに苦勞があったか、自分でもはっきりした焦点はつかんでいない。具体的な踏み込みに欠けているせいかも知れない。しかし、抑留の苦勞めいたようなものが、どこかに見え隠れしているようにも思われる。

ダモイ（帰国）

いきなり話は飛ぶようであるが、待ちに待ったダモイがやっとのこと実現しそうになった。といっても、シベリア抑留後、何年もたってからの話である。

ダモイのため一か所にラゲール（収容所）に集結した。ダモイ組は、大体、夜半に集合させられていた。私も、ダモイ組として夜半に起こされて集合した。空は暗れ、星空であった。全員集合を終え、出発を待たばかりであった。しばらくして、ラーゲルの係官らしき人が、いきなり「これから呼ばれた者は帰って寝てよい」と言った。夜空に響いたその余韻は、いやな予感めいたものとなって走った。そのうちに私の名前が呼ばれた。耳を疑った。しかし、それは現実であった。五、六人呼ばれたような気がした。仕方なく元の寢床にたどりついた

が、ショックだった。

時は過ぎた。またダモイのときが来た。例のごとく夜半の集合、今度は本物だろうと自己推理して、皆と一緒に夜空に並んで待った。また、例のごとく係官の声である。再び私は帰って寝てよい組に入った。そこで、ダモイは当然不可能だと思った。しかし、理由がのみ込めない。翌日、係官に帰国できない理由を求めた。「お前はこういうことでリストに載っているんだ」と帰国できない理由を説明した。こういうことは、こうであった。

捕虜となって

私は、終戦を満州のハルビンで迎えた。玉音放送直後に一青年将校が銃口を食わえて自殺した。それが終戦と同時に起きた記憶に刻み込まれた印象として残った。二十年八月二十八日、海林収容所から貨車に乗せられ、ソ連の東海岸近くに位置したコムソリスクの西の奥地に捕虜として第一歩を踏み出し、ノルマ付き重労働を強制される結果となった。私は、隊員千人の作業大隊所属であった。

月日のたつに従っていろいろな問題や障害を体験した。

ある問題のため、私は、酷暑に何日間も火の気のない営倉に入れられもした。私は、軍医としての任務上、隊員の健康管理の責任者であった。日本軍隊式に、けがや病気で作業に出られない者を練兵休として休ませた。最初のうちは、四、五人程度であったが、十人、二十人とふえ、ついに八十人にまで達した。それは、毎朝の朝礼時に、大隊長に報告するようになっていた。八十人にまで達したとき、ラーゲルの所長からクレームがついた。患者が多く出るのは軍医の責任である。即決である。衛生兵との交代を命ぜられ、即刻、伐採班に回され、毎日がまき担ぎであった。一種の懲罰である。それから鉄道路線の側溝掘り、土地爆破のための井戸掘り、零下三十度といえは寒さが身にしみるはずだが、労働の汗は、上衣を脱いで上半身裸になっても寒さは感じられない。なれば零下三十度は暖かい。ツルハシ、シャベルを持った寒気の中の裸の列である。零下五十五度も体験したが、そのようなときには作業はもちろん休みであった。月日のたつにつれ、いわゆる民主運動、すなわち洗脳教育なるものが各ラーゲルで盛んになった。そこには、

洗脳パス者でなければダメイはできないという雰囲気であった。勢い、それは仮面をかぶった洗脳者を生む結果ともなった。洗脳教育の一端として壁新聞が必要欠くべからざるものとなってきた。もちろん、私たちのラーゲルにもその風潮は流れ込んできた。いざ壁新聞をつくる段になっていろいろ曲折を伴ったが、結局、私とその責任者となり、他に二、三人が投稿することになった。

ラーゲルは生けす

私は、「生簀」と題して投稿した。日本の伊勢湾でとれたエビは、一たん生けすに入れられる。大海で自由に生息していたエビが、いきなり箱詰めに使われての長距離輸送には環境の急変がもたらす危険を伴う。我々の環境は、伊勢湾でとれたエビと同じである。すなわち、ラーゲルという生簀にて環境の急変に順応すべく体調を整えている、といった意味のことを書いた。

その生けすの壁新聞が張り出された。それがソ連の諜報官の知るところとなり、係官から「お前らを生けすに入れたのはだれか、ソ連の主権者か、または日本の主権者か」との尋問である。以後、懲罰を背負うものとなり、

転々として、最後は樺太対岸のソフガワニのラーゲルに収容された。聞くところによると、その同じラーゲルに関東軍参謀らも収容されていたとのこと。「生簀」の一文だけではないかもしれないが、リストに載り、それがどこまでもついて回り、ダモイの障害になっていたとは考えてもみなかった。

地獄の門

前に二回もダモイを見送られたが、今回三度目となった。私もダモイ組に編入させられ、ナホトカの収容所に移動させられた。しかし、二度あることは三度、信用が置けなくなった。一種の反発的あきらめである。また、「これから呼ばれる者は」の組に入るに違いない。半ばあきらめのように覚悟めいたものがあつた。

夏の晴れた暑い昼前であつたと記憶している。いよいよダモイの集合である。ラーゲルの焼けつくような広場に座って並んで待たされた。何時間待ったか。ラーゲルの門が開いた。私の後にいた青木という者が、私の肩をつついて「地獄の門が開きましたね」と言った。とっさのことで、私はその言葉の意味の理解に苦しんだ。二度

もダモイを見送られたものとしての複雑さが、そこにあつたからであろう。私は、黙って、それに対して自問自答した。そのうちに、一人々々が呼ばれて出口の方へ進み出た。そして門を抜け出て外へと出ていった。だんだん私の方まで近づいてきた。名前を呼ばれたかどうかは覚えていない。お前は元の場所へ戻って、と言われるのではないかと胸が落ち着かない様子。それはほんの一瞬の間だったろう。私はとにかく門の外へ出られた。逃げるように走ったようだ。先に着いて並んで待っていた人たちに合流し、やや安堵感で雑談を交わして待った。しかし、私の後からすぐ来るはずの青木君の姿が見えない。気になって、しばらく後の方まで逆戻りして行ったが、見つからない。先に青木という者が言った地獄の門の意味は「地獄の門から出られる」「地獄行きの門が開かれた」の両方の意味が初めて現実味を帯びて脳裏をかすめて行った。

いよいよ乗船、船のタラップを思い切つて登つていった。甲板にたどりついてやっと安堵感がわいた。あとは出航を待つばかり。

二十三年八月十九日、内地帰還のためナホトカ港出發、二十三年八月二十二日舞鶴上陸。即日、召集解除となった。帰還船は山澄丸であった。

シベリア抑留体験記

滋賀県 杉本 武男

私は終戦の年、昭和二十年より二十三年八月までシベリア（ライチハ）地区の炭坑にて酷寒飢餓労働に耐え、九死に一生を得て復員した者です。

満州にて終戦を迎えたのが昭和二十年八月末のこと。ソ連軍に武装解除をされ、ソ連軍の支配下に属し、昼はバレイシヨの収穫、そして夜は強行軍ということで、黒龍江を渡り、ソ連領に入る。

ライチハ收容所に到着するのにかかりの日数がかかった。我々捕虜が約八千人收容されたと聞いたが、酷寒の一冬で約半数の四千人となった。これも毎日々々炭坑に出る労働で体力も弱り、栄養失調となり亡くなったので

ある。

朝、炭坑に出て体が悪いので「班長の許可」を得て仕事を休んでいる我々戦友が、作業を終えて帰るときにはすでに死んでいるみじめさであった。また幕舎暮らしの小隊の中でも一晩に十一人死んだ。さすが小隊長の目に涙が光っていた。今もこれだけは忘れられない。

自分もいつか死ぬか、不安な日々を送った。このようにして死者が多く出ると、死屍当番に勤務しなければならぬ。今思い出すと昭和二十一年一月ころのことである。ソ連の埋葬地に戦友を埋葬したことである。トラックに石炭を積み込み埋葬地に出発する。ソ連の言葉が通じないが、通訳曰く、これから長さ二・五メートル、深さ二メートル、幅七〇センチを七個掘れとのこと、七人ほどの者が石炭をたきながら一日がかりでようやく掘り終わったのが夕方である。掘り上げた土砂が凍結してカチカチとなる。確か零下四十五度の寒さであった。

すると、ソ連の埋葬従事者がトラックに日本人四十九人の死体を積んでくる。何と一つの穴に七人ずつを埋葬したのである。何と残酷なことであろう。この世の地獄